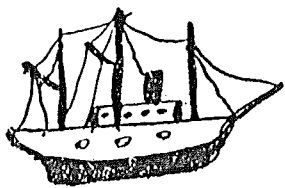


中学校技術科の構想とその問題点

長谷川 淳



文部省の教育課程審議会は、三月十五日に「小学校中学校教育課程の改善について」文部大臣に答申した。この新しい中学校の教育課程の中に、あらたに「技術科」という教科が設けられることになった。この技術科について編集部から標題のような見解をもとめられたのであるが、答申にあらわれた文章だけでは、その構想もあきらかでないし、問題点を指摘することも困難である。これまでともかくそうであったが、答申の主旨や文章に表現されたことは立派であつても、その意図や腹案は全く異質なものであつたり、学習指導要領の作成の過程で、全く無残に調理されることが普通である。したがつてここでは、予想される構想と問題点を指摘にとどめなければならぬ。

この教科は、職業・家庭科を廃止してそれにかわるものとして生れたものである。答申の「基本方針」にのべられているように、「最近における文化・科学・産業などの急速な進展に即応して……国民の教育水準を一段と高め……、科学技術教育の向上については……技術科を設けて、科学技術に関する指導を強化する」というのであれば、なおさらよいことであるが、職業・家庭科が廃止されたということだけでも、子どもたちの成長と教育の前進のために喜ぶべきことであり、この教科の発足にかなりの期待をもつてもよいと思う。それは、この教科の教育は、従来よりも悪くなることは考えられないからである。

学習指導要領通りの職業・家庭科は、普通教育上でも職業教育の上でも何の役にもたなかつた。他の教科では、社会科学でも理科でも、内容のえらび方や指導方法は

上で多くの問題点があつたにしても、少しづつものをおぼえ、能力が身につけていった。職業・家庭科にはそれがない。この教科の効果は、苦役にたえる能力を身につける以外に何もない。

文部省のある担当官が、「これまでの学習指導要領では古代の農法を教えたが、これをせめて仁徳天皇時代の農業まで高めたものだ」と言つたという話が伝わっている。筆者もある教育系の学生諸君に菊池文部大臣の発言を念頭におきながら「日本の職業・家庭科の教育は、明治三十年代のものとかわりがない」と言つたら、ある学生が発言し、「現在の教育がそんなに新しいんですか」と問いかえされたことがある。

職業・家庭科のマイナスの役割についてはすでに論議しつくされていると言つてもよい。それは、他教科で学習した知識や能力の成長をおさえつけ、子供たちをかたわに成長させ、全面的な発達をばらばら、分裂した性格をうえつけ、肉体の発達をこえた労働を行わせ、低い条件で職業戦線におくり出す以外の何物でもなかつた。現場の教師たちが子供を大切に、その成長を願ひ、また科学や技術を大切にすればするほど、すなわち教育に熱心であればあるほど、学習指導要領の基準からそれざるをえなかつたことが、教師たちの研究会で数多く報告されている。

新設された技術科の要点は次のようなものである。

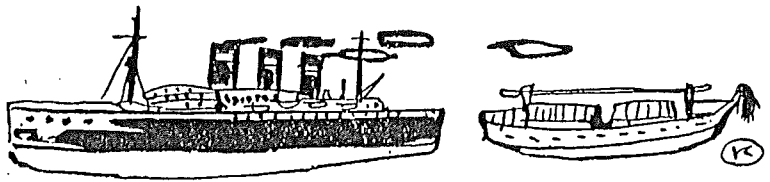
- (1) 現行の必修の職業・家庭科を改め、これと図画工作で取扱ってきた生産的技術に関するものをあわせて、技術科を編成する。
- (2) 内容を男子向と女子向の二系列とし、男子には工業的内

容を中心とする系列、女子には家庭科の内容を中心とする系列を学習させる。

- (3) 理科との関連において内容を精選し、系統的学習ができるようにすること。
- (4) 現行の選択教科としての職業・家庭科を改めて、農業科・工業科・商業科・水産科・家庭科とし、必要に応じて、そのうち一つ以上を履修させるようにし、第三学年では進路に応じてさらに多くの時間を充たせるようにすること。
- (5) 従来職業・家庭科の中にあつた職業指導を、教科の中からとり除き、特別教育活動の中の学級活動にうつし、その中の進路指導の一部としておこなうようにすること。

この技術科の成立によつて、生産技術的教科が、国民に共通な義務的な普通教育の教科として、中学校の教科課程の中に入れて、その場所を占めたものと考えることができる。従来の職業・家庭科も普通教育の教科だと言われてきたが、地域によつて学習内容を異にし、地域の産業の要求にこたえることを目的とし、いわば低度の職業訓練であつた。この職業的訓練が必修の教科から消え去つたことは、このような訓練を拒否する権利が子ども側に保留されていることになる。

技術科の中に男女別の二つの系統を設けたことについては、男女別々の教育を行い、女子を家庭に閉ぢ込めるものであり、義務教育の普通教育として妥当なものではないという批判が、この答申が発表された直後から出されている。しかし従来の職業・家庭科が男女共通の教科であつたが、現実には男女別のコースが設けられ、したがつて今度の改正は、むしろ職業・家庭科あるいは家庭科との妥協の産物と見るべきであらう。一方、技術科の名称のもとに「基本方針」に述べられた主旨をもつて女子向の系列がつくられたとすれば、「ごはんたき」や「ぞうきんつ



くり」にはじまる家事裁縫の学習にひきもどすのではなく、これから脱却してもつと近代化した生活技術の学習を行わせようとするものと考えることができる。そうであるならば女子コースにおいても、従来以上に生産技術と関連し、自然科学的基礎をもつた技術の学習ができるのではないだろうか。

次に、本来社会科が担当すべき、職業生活および家庭生活についての知識理解が、この技術科からはふかかれています。この教科の自然科学的、技術的、実際的な性格と役割をあきらかにしたものと考えることができ。従来、職業、家庭科にこの「知識理解」を特別に含ませることによつて、職業の学習においては、立身出世の道を教え、階級的な差別を宿命的におしつけ、また誤つた情報を与えることによつて職場に送り出し、また家庭の学習においては、古い家族関係や主従関係をおしえ、家族関係のゆがみを道徳や愛情の問題でおおいかくし、総じて非教育的な教育がおこなわれ、分裂した性格をうえつけることに役立ついた。

この職業知識や職業情報がはぶかれたことと関連して、職業指導が教科の中のものではないことが明確にされたことは、今度の改正の中で特別に注目してよいことの一つである。

このたびの教科課程の改正、技術科の新設によつて、改正の「基本方針」に述べられているような目標が達成できるであろうか。最近の文化、科学、産業の急速な進展に即応して、国民の教育水準、科学、技術的水準を高めていくためには、教育課程の根本的な改造が必要であ

る。今後の技術科の具体的な内容をきめていく過程で、またそれを実施していく過程で、次の点に注意して十分監視していく必要がある。

科学技術の水準を高めていくためには、国民全体の文化的水準を高め、科学技術の山の裾野を広く強固にしていかなければならない。そのためには職業的分化をできるだけおそくし、少くとも義務教育の段階では、別々のコースをおくことは不適当である。したがって女子向の系列の内容はできるだけ男子の系列と同じものをとるようにする必要がある。また選択教科をとらないようにすべきである。

次に、これからの技術科の教育は、自然科学的基礎をもつた教育でなければならぬ。答申に述べられている「理科との関連において内容を精選する」ということは、教科間で前後関係や重複を調整することではなく、実験や製作を通して知識を固定させ原理に精通させ、法則を応用し、実際によつて法則を確かめるという点で関連をもたせ、むしろ必要な重複はくりかえして行うことが必要である。小学校の教科課程の中間発表に見られたような「男子にもホウキの使い方を教え……男女ともエプロン、ぞうさんの縫い方やカンナのかけ方程度は共通して教える」ようなことは厳重に警戒しなければならぬ。

最後に、「技術科」が「道徳」とならんで新設されたことに特別に警戒しなければならぬ。「生命体を持久的に愛育することや「しつけ」を強化することによつて、自然の法則にすなおに従う心、するどい観察力、巧みな手がにぶるようなことがあつては、正しい技術科の役割をのばしていくことを期待できない。

(東京工業大学)